

今古奇觀
下

嬌紅記

中国古典文学大系 38

平凡社

今古奇觀 下

抱甕老人編 駒田信二・立間祥介訳

嬌紅記

宋遠作 伊藤漱平訳

訳者紹介

こまだしんじ
駒田信二 1914年三重県生。東京大学文学部卒。専攻 中国文学。主著「石の夜」(角川書店)「新墨子物語」(河出書房)「水滸伝」(平凡社「中国古典文学大系」)「対の思想」(勁草書房)「島」(筑摩書房)

たつましろうすけ
立間 祥介 1928年京京生。善隣外事専門学校卒。専攻 中国文学。慶応義塾大学教授。主訳書「従文自伝」(河出書房)「三国志演義」「児女英雄伝(抄)」(平凡社「中国古典文学大系」)「呼蘭河の物語」「野火と春風は古城に闘う」(平凡社「中国現代文学選集」7・12)「中国講談選」(平凡社「東洋文庫」)

いとうそうへい
伊藤漱平 1925年愛知県生。東京大学文学部卒。専攻 中国文学。東京大学文学部教授。主要訳書・論文「紅樓夢」(平凡社「中国古典文学大系」)「紅樓夢評論」「われら愛情の種をまく」(平凡社「中国現代文学選集」1・13)「曹雪と高鶚に関する試論」(北大外国語外国文学研究)2)

中国古典文学大系 全60巻

今古奇観 下・嬌紅記

第38巻

1973年4月27日 初版第1刷発行
1984年12月15日 初版第10刷発行

訳者	駒立伊	田間藤	信祥漱	二介平
発行者	東京都千代田区三番町5番地	下中邦彦		

発行者	郵便番号 102 東京都千代田区三番町5番地 振替・東京8-29639	株式会社	平凡社
-----	---	------	-----

不良本のお取換えは直接読者サービス係まで 印刷 東洋印刷株式会社
お送り下さい。(送料は小社で負担します)。 製本 株式会社 石津製本所
定価は外箱に表示してあります。

© 株式会社 平凡社 1973 Printed in Japan

目 次

今古奇観 下

第二十三話	蔣興哥 重ねて珍珠衫にあうこと……………	三
第二十四話	陳御史 巧に金釵鉋を勘くこと……………	三
第二十五話	徐老僕 義憤して家を成すこと……………	六
第二十六話	蔡小姐 辱を忍んで仇を報いること……………	六
第二十七話	錢秀才 錯って鳳凰の儔を占ること……………	一五
第二十八話	喬太守 鴛鴦の譜を乱め点めること……………	二六
第二十九話	私怨を懷いて 狼僕 主を告ること……………	二六
第三十話	親の恩を念って 孝女兒を蔵すこと……………	二七
第三十一話	呂大郎 金を選して骨肉を完うする……………	二七
第三十二話	金玉奴 棒もて薄情郎を打つこと……………	二八

第三十三話	唐解元 世を玩いて奇を出だすこと……………	三三
第三十四話	女秀才 花を移して木を接ぐこと……………	三四
第三十五話	王嬌鸞 百年に長恨けること……………	三三
第三十六話	十三郎 五歳にして宮中へ上ること……………	三三
第三十七話	崔俊臣 幸運にも芙蓉の衝立に出会……………	三三

第三十八話	趙鼎君 喬って蜜柑を贈ること……………	三六
第三十九話	妙術を誇して 丹客 金を提るこ……………	三七

第四十話	錢多きに逞せて 白丁 帯を横にす……………	三三
------	-----------------------	----

嬌紅記……………	三六
----------	----

付録 一 『嬌紅記』題辭……………	四三
付録 二 『嬌紅記』總評……………	四四

付録 三 陳珙綬「王嬌娘圖詠」	四六
-----------------	----

『嬌紅記』略年表	四八
----------	----

地 図	五一
-----	----

解 説

今古奇觀	駒田信二	四三
------	------	----

嬌紅記	伊藤漱平	四三
-----	------	----

今^{きん}

古^こ

奇^き

観^{かん}

下

立^{たち} 駒^{こま} 抱^{ほう}

間^ま 田^だ 妻^{さい}

祥^{しょう} 信^{しん} 老^{ろう}

介^{かい} 二^に 人^{じん}

訳 編

第二十三話

蔣興哥 重ねて
珍珠 杉に会うこと

身分も金も知れたもの
七十年とは持ちはせぬ
死ねば総てそれつきり
万事は夢かまぼろしか

おやめなされよ若い人
酒や女色にまようのは
浮世の欲をふりすてて
分相應に暮らすがい

この詞は「西江月」といって、人は分に安んじておのれを守り、あたえられた運命のままに楽しく暮らして、「酒」「色」「財」「氣（怒り）」の四字のために精神をそこない身をもちくずすことがないようにと教えたものである。うれしいときが実はうれしくはなく、得をしたようなときがかえって損をしているのである。

この四字の中でも、とりわけ「色」の字はひどくて、眼は情のなかだち、心は欲のたねというが、はじめるときにはいろいろと氣をもみすんでしまえばげっそりとするものである。それも、行きずりの女にたまたま浮かれるくらいなら、たいした損にはならないが、よからぬ

ことをたくらんで風紀をみだしたりするのは、ただ自分の楽しみばかりを考えて、人の長年の恩義を思わないやりかたである。かりにみなさんがきれいな奥さんやかわいいお婆さんをもっておられるとして、ほかの人がそれに手を出したら、どんな氣持ちがすることか。昔の人がうまいことをいつている。

人のころはくらませぬ
お天道さまが見てござる
人の女房に手出しせにや
自分の女房も取られまい

きょうはみなさんに「珍珠 杉」という話をして、因果はめぐるものだと悟っていただき、これを若い子弟の手本にしてもらいたいです。

さてこのお話の、姓は蔣、名は徳、幼名を興哥という人は、湖広襄陽府は襄陽県の生まれ。父親は蔣世沢といって、小さいときから広東を渡り歩いた旅商人で、女房の羅氏には先立たれ、あとに残ったのは今年九つになるこの興哥だけ。ほかに子供はなかった。蔣世沢は興哥を手放すには忍びず、そうかといって広東での衣食の道を捨てるわけにもいかなので、いろいろ思案にくれたが、どうしようもなく、この九つの子供を旅の道づれにして、世渡りの法などを覚えさせることにした。この子供、年は若い、生まれつき、

目もとすずしく眉秀で、紅い唇ましろの齒。歩む姿はきりりとし、言葉づかいもそつがない。その賢さは学者ときそい、利口なこと

は大人に負けぬ。役者小僧と人からいわれ、無二の宝と誰もうらやむ。

蔣世沢は人からねたまれるのが怖いので、つれて歩いても自分の息子だとは言わずに、妻の甥の羅の若旦那ということにしていた。羅家もやはり広東の旅商人だったが、蔣家はまだわずか一代なのに、羅家はもう三代もつづいていて、その地方の宿屋や仲買業者などは、みな羅家とは代々の知りあい、まるで自分の親戚のようにしていた。蔣世沢が旅あきないをはじめた当座は、やはり舅の羅さんにつれられて歩いたものである。ところが羅家もこのごろたびたび裁判沙汰に負けたらして、家運がかたむき、もう長いこと商売をやめていた。それで、知りあいの宿屋や仲買業者は、蔣世沢に会うといつも羅家の消息をたずねて、しきりに案じたが、こんど蔣世沢が子供をつれてきたのを見て、それが羅家の若旦那だということを知り、なかなか眉目秀麗で応対もはきはきしている、三代もつづいたつきあいがこれで四代目になるかと、誰一人よろこばない者はなかった。

それはさておき、蔣興哥は、父親について何度も旅あきないをしていううちに、だんだん利口になって商売もうまくなり、なんでもできるようになったので、父親もずいぶんよろこんでいた。ところが思いがけなくも、十七のとき、父親は病気で死んでしまったのである。ちやうど家にいるときで、旅先でなかったことがせめてものなぐさめだった。

興哥は泣き悲しんだが、そうばかりもしておれず、涙をぬぐって後始末をした。納棺埋葬から、誂経供養にいたるまでひととおりすましたことは、言うまでもない。七七四十九日には親戚の者がみなきてお

弔いをした。

同じ県に王さんという人がいて、興哥の許婚の父親だったが、やはり法事にやってきた。蔣家の親戚の者はお相手をしなければならなかったが、話をしているうちに、興哥は年は若い世なれていて、こんどの葬儀も独りでやってくれた、というような話になったので、ことのついでに誰かが、

「王のご隠居さん、お嬢さんももう大きくなられたのだから、こんどの不幸を機に式を挙げて二人をいっしょにしてあげたら、うまくやっていけるのじゃないですか」

とすすめたが、王さんはまだ承知せず、その日はいとまを告げて帰って行った。親戚の人たちはやがて葬儀万端がおわると、こんどは興哥にすすめた。興哥もはじめは承知しなかったが、なんどもすすめられ、自分が親のない独り者であることを思つてついに承知し、仲人を含めたので王家へつたえに行かせた。王さんはひたすらことわつて言うには、

「わたしの家でも嫁入り道具を用意しなければなりません、いますぐというわけにはいきません。それにまだ喪もあけないのですから、札からいっても具合がわるいでしょう。式を挙げるにしても、一周忌がすんでから改めてご相談いたしましょう」

仲人は帰つてそのことを伝えた。興哥はもつともだと思つて、それ以上強要はしなかった。

光陰は矢のごとく、いつしか一周忌になった。興哥は父の法要をすませて喪服をぬぎ、改めて仲人にたのんで王家へ話しに行つてもらったところ、ようやく承諾され、やがて諸儀万端ととのつて、新婦家をに迎え入れた。「西江月」の詞に、

喪の幕とって紅幕にかえ
喪の服ぬいで色ものを着
部屋には明りきらきらと
用意はととのう晴れの席

嫁入り道具もどっさりと
世にもあでなる花嫁さん
今宵うれしや夫婦の契り
あしたはめでたい祝い酒

この花嫁は王さんのいちばん末の娘で、幼名を三大児さんだいじといったが、七月七日の生まれなので三巧児さんきょうことも呼ばれていた。先に嫁に行った二人の娘も、そろって器量よしで、桑陽そうよう泉の人々は、こんな歌を作ってうらやましがっていた。

世間に女はいっぱいいいるが
王家の娘よな美人はいない
あんな娘をもしもらえたら
天子の婿になるよりもよい

諺にも「商売のしくじりは一時の損、女房のまずいのは一生の損」というが、お役人や金持ちなんかなになると、家柄をえらんたり持参金を欲はったりするばかりで、器量のよしあしなどおかまいなしに縁組をきめてしまい、やがて、とんでもない醜女みにくめを娶めとって、親戚一同の前で挨拶する段になると、舅しゅうとや姑しゅうとめははなはだ興がさめ、婿は婿でおもしろくなく、結局は妾をかこったり女遊びをしたりするようになる。

ところが醜女にかぎって、とかく亭主のことをかまいたがるものである。そこで、世間なみの者ならさっそくいがみあいになるし、体面を考えて一、二度遠慮したりすれば、相手はますますつけあがってくるというもの。こんなことになってはまずいので、蔣世沢は、王さんが可愛い娘を持っていることを知って、小さいときからいろいろ贈り物をし、末の娘と約束をきめて、息子の嫁にしたのである。いま、家に迎えてみると、果たして惚れられするようなよい女で、いうならば二人の姉よりもはるかに器量よしであった。まさに、

呉宮ごきうの西子さいしもかなわない
楚國そこくの南威なんいもなんのその
強つよいていうなら水月すいげつ観音
お香をたいておがみたい

蔣興哥がもともと美男子なところへ、この美しい妻を娶ったのだから、名工がみがき上げた一對の玉のような夫婦で、その仲むつまいことは人一倍であった。三日目が過ぎると、もとおりじみな色の服に着かえ、喪中だというわけで、外へは顔出しをせずに、もっぱら二階にとじこもって、あぐれ水入らずの楽しみをつづけた。まことに、なにをするにも離れず、夢の中まで二人づれ。

昔から「苦しい月日は忍び難く、楽しい時は過ぎ易い」というとおり、季節は移り変わって、いつしかもう三年の喪も満ちてしまったが、この話はこれまでとする。

興哥はある日、父の存命中の広東の商売が、もう三年あまり放ってあって、あちらにはまだたくさんのお掛けを残したままで、取り立ててないことを思い出し、夜、女房に一度出かけてみたいと相談をした。

女房はじめは行ったほうがよいと答えたものの、あとで、長い道中の話になると、愛する夫と離れるのがつらくなって、思わず涙をこぼした。興哥のほうでも別れるのはつらい。二人は悲しんだあげく、結局行くのをやめてしまった。こんなことが再三あった。

月日は過ぎて、いつしかまた二年たった。そこで興哥はいよいよ出かけようと心をきめ、女房をだまして、他所でこっそり荷物をととのえ、吉日を選んでから、その五日前によく女房に話した。

「諺にも『坐して食わば山も空し』というが、おれたち夫婦も、なんとか仕事をしないことには、やがて暮らして行けなくなる。ちょうど二月で寒からず暑からず、出かけるのはいまがいちばんいい季節だ」

女房は引きとめてもだめだと思って、仕方なしに、

「これからお出かけになって、いつお帰りになるの？」

とたずねた。

「こんど出かけるのは仕方がないからだ。とにかく一年たったら帰ってくることにしよう。この次のときに、もっと長くいることにすればよいからな」

女房は庭の椿（つばき）の木を指さして、

「来年あの木が芽を出すころには、きつと帰ってきてくださるわね」

と言い、ぼろぼろと涙をこぼした。

興哥は袖で涙を拭いてやりながら、思わず自分の眼にも涙がにじんできた。二人は別れるのがつらく、ひとしおまさるその情愛は、とても一口では言いつくせない。五日目の夜になると、夫婦は泣きながら夜どおし語りあって、ついに一睡もしなかった。五更（朝の四時）ごろになると、興哥は身支度をし、親譲りの真珠や粒銀をみんな女房に渡して保管させ、自分はただ元手の銀子と帳簿、それに着物や蒲団だけを持って行くことにした。また、用意しておいた手土産（てみやげ）も、みなきち

んと包んだ。もとからいる二人の下男のうち、若いほうをつれて行くことにし、年のいったほうは家に残して女房の用たしに使わせ、二人の婆さんにはもっぱら台所をやらせ、また二人の女中、一人は晴雪（はるゆき）といい、一人は燐雪（りんゆき）といったが、二人にはもっぱら部屋につき添って離れないようにと言いつけた。言い渡しがすむと、また女房に向かって、「我慢をして待っていなさい。この辺には浮気な若い連中が多いし、それにおまえはきれいだから、外をのぞいたりなどして、まちがいを引きおこすんじゃないよ」

「ご心配なく。早く行って早くお帰りになってください」

二人は涙ながらに別れた。まさに、

とかく浮世はつらいもの
しよせんは死別か生別か

興哥は旅に出たが、ただ女房のことばかり思いつめて、一日じゅう気にしていた。やがて広東に着いて、宿をとると、昔の知りあいがみんな会いにきた。興哥が手土産を贈ると、どの家でも酒を出して歓迎してくれたが、それがずっと半月ほどもつづいて、身体のやすまる暇もない。興哥はもともと家で身体を弱らせていたところへ、道中でも苦勞をし、こちらに来てからはまた不節制に飲み食いしたものだから、とうとう瘧（さ）にかかって、一夏じゅうぐあいがわるく、秋になるとこんどは下痢（げり）になって、毎日医者にみてもらったり、薬をのんだりしたあげく、やがて秋も終わろうとするころ、ようやくなおったものの、商売のほうのはのびのびになって、みすみす一年をすごして、帰ることができない。これこそ、

わずかな儲けに目がくらみ
可愛い女房をふりすてる

興哥は家のことを思いつめていたが、日がたつにつれて、むしろだんだん忘れていった。

興哥の旅さぎのことはさておいて、こちらは女房の王三巧児。あの日夫に言いつけられてから、数ヵ月間というものは、一目も外を見たことはなく、一足も外へ出たことはなかった。光陰は矢のごとく、いつしか大晦日になり、家々ではさかんに松明を焚いたり、爆竹を鳴らしたり、酒を飲んだりして、家じゅうで楽しくたわむれている。三巧児はそぞろに悲しくなり、夫のことを思って、その一夜はこのほか淋しかった。それは全く古人の詩のとおりで、

臘(年)は尽くるも愁は尽き難く

春は帰るも人は未だ帰らず

朝来寂寞を添え

肯て新衣を試いず

明けて正月の一日、年のはじめである。晴雲・煖雪の二人の女中は、しきりに奥さんに、表二階へ行つて街の様子を見物するようにすすめた。そもそもこの蔣家の住居は、前後つづいた二棟の二階家で、前の棟は大通りに面し、後の棟は寝室になっていた。三巧児はいつも後の建物に寝起きしていたが、その日は女中たちがあまりにすすめるので、仕方なしに脇部屋を通過して表二階へ行き、窓をあけて簾をおろさせ、簾の内側から外を眺めた。

その日は、街はたいへんなにぎわいだった。三巧児が、

「ずいぶん通りが多いけど、易者は一人もいないようだね。もしいたら、呼んできて旦那さまの消息を卜ってもらいたいんだけど」と言うのと、晴雲は、

「今日は元旦で、みんな遊んでおりますから、トイをしに出てくる者もないでしょう」

すると煖雪が、

「奥さま、わたしたち二人におまかせくださいませ。五日のうちにきつと呼んできて卜わせますから」と言う。

四日の朝食がすんでから、煖雪が階下へおりて廊へ入ると、ふと街からジャンジャンという音がきこえてきた。それは「報君知」というもので、めくらの売卜者の道具である。煖雪は用もそこそこにして、あわててズボンの紐をしめ、門から駆け出して行つてめくらの易者を呼びとめると、引き返して一気に二階へ駆けあがり、奥さんに知らせた。三巧児は、階下の客間へ通しておくように言いつけ、料金をたずねさせて、お祈りしてから、階下へおりて行つて卜ってもらった。めくらの易者は卦をたててから、なにをききたいのかとたずねた。そのとき台所の二人の婆さんもさわぎを聞いて駆けつけてきて、奥さんに代わつて言った。

「旅に出ている人を卜つてほしいのですよ」

「ご主人のことをおたずねですか？」

「そのとおりです」

と婆さんが言うのと、易者は、

「青竜、世を治め、財の卦あらわる。ご主人のことをおたずねならば、旅の人は道半ばにあり。金帛千箱あつて、風波一点もなし。青竜は木

に属し、木は春にさかんなり。立春前後にすでに出発されましたから、今月末か来月初めには必ず帰ってみえます。しかも十分にお宝を持っています。

三巧児は用人に言いつけて銀子三分を渡して易者を帰らせ、大よろこびで二階へ上がつて行つた。これこそいわゆる「梅を眺めて渴きを止め、餅を画いて餓えに充つ」である。

だいたい、人は見込みのつかないうちはあまり氣にとめないが、いったん見込みがつくと、あれこれと思ひわづらつて、いても立つてもいられないものである。三巧児は売卜者の言葉を真に受けたために、夫の帰ってくることをばかりを考えて、それからというものはいつも表二階へ行つて、きよろきよろと外を眺めていた。やがて二月の初めになつて、椿の木が芽をふいたが、なんの音沙汰もない。三巧児は夫の出がけの約束を思つて、いよいよ心がみだれ、日になんべんも外を眺めていたが、これもそういう定めだつたのだらう、やがて一人の若者にめぐりあふことになる。まことに、

千里離りよと縁ありや会える
鼻のさきでも縁なきや会えぬ

その眉目うるわしい若者は誰かというところ、もともとこの土地の者ではなく、徽州は新安県の生まれで、姓は陳、名は商、幼名は大哥哥といつたが、のちに大郎と変わった。年は二十四で、なかなかの美男子。宋玉や潘安にまさるとまではいかななくても、二人に劣るというわけでもない。この大郎もやはり両親をなくし、二、三千の元手をかきあつめて、襄陽に来ては米や豆などをあきながつて、毎年一度はきまつてやつてくるのだつた。宿はいつも城外にきめていたが、その日はた

またま城内へはいつて、大市街の汪朝奉（朝奉は金持ちに對する宋代の呼称）の質屋へ、家からの便りを問ひあわせにきたのだつた。その質屋がちょうど蔣家の向かいだったので、そこを通りかかったというわけ。どんな身なりをしていたかというところ、頭には蘇州風の高い簪帽をかぶり、身にはあざぎ色の湖州の紗の普段着を着ていて、それがまた、蔣興哥のいつもの身なりにそっくりだつた。

三巧児は遠くに眺めて、夫が帰ってきたとばかり思ひ、簾をかがげてじつと見つめた。陳大郎は顔をあげて、二階から若い美人がまばたきもせずに眺めているのを見ると、自分が好きなのだらうと思ひこみ、自分も二階へ向かつてめくばせをした。ところが、これは二人とも思ひがちがいをしていたのである。三巧児はそれが夫ではないとわかと、恥ずかしさに頬を赤らめて、あわてて窓を閉め、裏二階へ駆けこんで、寝台のふちに腰をおろしたまま、いつまでも胸をどきどきさせていた。ところが陳大郎の心は、はやくも女の眼に射すくめられてしまつて、宿へ帰つても一途に思ひつめて忘れられず、心の中に思うには、

「うちの女房もかなり美人だが、あの女にくらべたら膝元に寄れない。なんとかしてよしみを通じたいものだが、どうにも手のつけようがない。もし一晩でもあの女と寝ることができたら、この元手をみんなつかつてしまつても、本望というものだ」

なんども溜息をついているうちに、ふと思ひ出した。「大市街の東の町に珠売りの薛婆さんというのがいて、おれも取引したことがある。あの婆さんは口がうまいし、それに毎日あちこち町を歩きまわっているから、知らない家はないだらう。あの婆さんに相談したら、きつとうまくいくだらう」

その夜はしきりに寝返りをして、どうにかすこした。翌日早く起き、用事があるといつて、水をもらつて髪をとかし顔を洗うと、銀子百両



臘は尽くも愁は尽き難し

と金塊二つを持って、急いで城内へ駆けつけた。これこそ、

生きて楽しみたければ
いのちをかけてひと苦労

陳大郎は城内にはいると、まっすぐに大市街の東の町へ行って、薛婆さんの門をたたいた。薛婆さんは髪をもじやもじやにしながら、中庭で珠選りをしているところだったが、門をたたく音がしたので、珠の包みをかたづけながら、

とたずねた。

「徽州の陳です」

と云うのを聞くなり急いで門を開けて迎え入れ、

「まだ髪もとかしてなくて、失礼いたします。ずいぶんお早いのですね。どういうご用でしょうか」

「わざと早く来たのです。おそくなると会えないかと思ってね」

「あたしに真珠の髪飾りでも捌かせてくださるのですか」

「真珠も買うが、それよりもっと大きな取引を世話しますよ」

「あたしにはこの商売のほかには、なんにもできませんけど」

「ここで話すのはどうも……」

薛婆さんは表門を閉め、彼を小部屋に通してからたずねた。

「どういうご用でしょうか」

大郎はあたりに誰もいないのを見ると、袖から銀子を取り出し、包みを開いて机の上に並べ、

「おっかさん、この百両をお収めください。話はそれからしましょう」

婆さんはわけがわからないので、受け取ろうとはしない。大郎は、

「たりないようですな」

と言い、急いでまた金色燦然たる金塊二つを取り出して、それも机の上に置き、

「この金子十両も、いっしょにさし上げます。これでもやはり受け取ってくださいしないと、わざとからかっていらっしやるのでしょうか。今日はわたしのほうからたずねてきたわけで、あなたがたずねてこられたのじゃ

ありません。こういう大きな取引は、あなたでなければできないと思つたからこそ、わざわざお願いにきたのです。たとうまくいかなかったとしても、この金銀は自由に使ってください。そうせずに、また取り返したりなんかしたら、あとで顔むけができなくなります。この陳商はそんなけちな男じゃありません」

左様、周旋婆などというのは、金には目のない者はかりである。これほどの黄金白銀を見て、心を動かさないはずはない。薛婆さんはたちまち満面に笑みをたたえて、

「旦那、誤解しないでくださいよ。あたしはこれまで、人さまから一厘一毛もすじのともらないお金をいただいたことはいないのです。今日は旦那がそうおっしゃるのですから、まあひとまずお預かりしておいて、もしお役に立つことができなかったときには、もとどおりお返しすることになります」

そう言うとき、金塊を銀子の包みの中へいっしょに包みこみ、

「あたしもまあ、ずうずうしい」

と声をあげて、寢室へしまいにいき、すぐ引き返してきて、

「旦那、お礼を言うのはあとにします。どんな取引にわたしを使おうとなさるのかおっしゃってください」

「さし迫って人の命を救う宝をさがしているのだが、それはほかのところにはどこにもなくて、ただ大市街の或る家にだけあるのです。わざわざおっかさんにおたのみするのは、それを借りてもらいたいということなのです」

婆さんは笑い出して、

「それはまたおかしいことをおっしゃる。わたしはこの町に二十年あまりも住んでいます、大市街に人の命を救う宝があるとは聞いたこともありませんよ。宝があるとおっしゃるのは、いったい誰の家なん

です？」

「わたしと同郷の汪三朝奉の質屋の向かいの二階屋は、あれは誰の住居ですか」

婆さんはちょっと考えてから、

「あれはこの土地の蔣興哥という人の家です。主人はよそへ商売に出かけてもう一年あまりになり、家には女の人がいるだけです」

「人の命を救う宝というのは、実はその女の人に借りたのです」

大郎はそう言って、椅子を婆さんの傍まで持って行き、かくかくしかじかと腹の中をうちあげた。

婆さんは聞きおわると、しきりに首を振って、

「それはむずかしいですよ。蔣興哥は、あの女房をもらってからまだ四年にもならなくて、夫婦は魚と水のように片ときも離れたことがなかったのですが、いまは仕方なしに外へ出ているのです。あの女房は二階から一歩も下りたことがなくて、とても操のかたい女です。興哥はちょっと偏屈なたちで、すぐ怒るので、わたしはいちどもあそこの敷居をまたいだことがないのです。あの女房がどんな顔をしているのか、それさえ知らないのですから、とてもお引き上げはできません。さっきいただいたものも、わたしに福がなくて、いただけなくなってしまうましたよ」

陳大郎はそれを聞くと、あわててひざまずいた。婆さんが引きおこそうとすると、彼はその袖を両手でつかみ、ぎゅっと椅子の上におしつけて身動きもさせずに、

「この陳商の命は、おっかさんの思いのままです。あなたにはきつと妙案があつて、わたしに思いをよげさせ、わたしの余生を救ってくださいます。首尾よく行ったときには、さらに銀百両のお礼をします。いやとおっしゃるなら、いますぐ死んでしまいます」

婆さんはあわててあとさきの考えもなく、つづけさまに、

「承知しました、承知しました。そんなにあたしをいじめないで、さあ、立ち上がってください、話がありますから」

陳大郎はやっと立ち上がり、手を携こひてお辞儀をしながら、

「どんな妙案です？ 早く教えてください」

「こういうことはゆっくり謀はからなければいけません。首尾よく行きさえすれば、いくら年月がかかってもかまわないでしょう。いついつまでと日を限られると、わたしにはお引きうけできません」

「結局うまく行くのなら、すこしぐらいおくれてもかまいませんが、とにかくどういう計略なんですか」

「明日、早すぎてもいけないし、おそすぎてもいけません、朝食がすんだころ、汪三朝奉の質屋でお会いすることにしましょう。旦那はたくさん銀子を持ってきて、あたしと取引をするふりをするのです。そこにちゃんと考えがあるので。もしあたしの両足が蔣家の門へはいることができたなら、それこそ旦那の仕合わせというものです。旦那は急いで宿へお帰りください。蔣家の門前をうろうろして、人に見破られ、大事をあやまるようなことのありませんように。ちょっとでも機会を見つけたら、あたしが知らせに行きますから」

「承知しました」

陳大郎はお辞儀をしながらそう言いって、よろこんで門を開けて帰って行った。まさに、

未だ天下を取らぬのに
まずはなったり大將軍

その日は格別の話もなく、あくる日になると、陳大郎はきちんと身

なりをととのえ、銀子三、四百両を大きな皮箱に入れて小者に背負わせ、あとについて大市街の汪家の質屋へ行った。見れば向かいの二階の窓はびったり閉まっていた、女はいないらしい様子である。そこで質屋の番頭に挨拶をし、木の腰掛を借りて入口に腰をおろし、東のほうを眺めていた。

まもなく、薛婆さんが竹皮の箱をかかえてやってきた。陳大郎は呼びとめて、

「なにがはいっているのだね」

とたずねる。

「真珠の髪飾りです。お入り用ですか」

「ちょうど買おうと思っていたところなんだ」

薛婆さんは質屋の中へはいって、番頭に挨拶をし、

「おやかましゅう」

と言いって、箱を開けた。中には真珠の包みが十あまりはいっており、ほかにも幾つか小箱があつて、新しい型の、花の群ぐんれに翠あざをあしらった髪飾りがいっぱいまつていて、すばらしい細工で、眼もあやに輝きらいていた。

陳大郎はいちばん大きな真珠を幾つか選び出し、それに簪かんざしや耳飾りなどを加えて、ひとまとめにしながら、

「これをみんなもらおう」

と言いった。婆さんはすると、心配そうな眼つきをして、

「お入り用ならさしあげますが、ずいぶん値が張りますよ」

陳大郎はすでにわけがわかつていたので、皮箱をあけて例の銀子をずらりと机の上に並べると、声を張り上げて言いった。

「これだけあれば買えないわけはなかるう」

そのときには、近所のひまな人たちが、もう、七、八人やってきて

いて、店先に立って眺めていた。婆さんは、

「ご冗談でしょう。決して旦那さんを見くびるわけじゃありませんが、この銀子をよくしらべて、お収めになってください。まともな値段をはらってくださるのならいいんですがねえ」

二人は、一方は高くしようとし、一方は安くしようとして、その値段は天と地ほどもひらき、すこしも交わらない。陳大郎のほうは品物を手にして、放そうともせず、値を上げようともせず、わざと軒先まで出て行って、一つ一つひっくりかえて眺め、ほんもののだのにせものだの、重いのか軽いのか、日の光の中できらきらさせるものだから、町じゅうの人々がぞろぞろと見に来て、しきりにやいのやいのとはやしたてた。婆さんはわめきたてて、

「買うのなら買い、買わないのならやめりやいいじゃないか。やたらに人を手間どらせたりして」

「買わないなんて言わんぞ」

二人はまたひとしきり値を言い争った。

値を言い争うその声に

驚きたまげる美しの人

王三巧児は、向かいでがやがや言っているのを聞いて、つい表二階へ行き、窓をおしあけてのぞいて見た。すると、きらきらときらめき光るすばらしい真珠が見え、また婆さんと客が値を言い争っているのが見えた。そこで女中にその婆さんと呼んでくるように言いつけて、品物を見せてもらうことにした。晴雲がかしこまって表へ出て行き、薛婆さんの袖を引っばって、

「うちの奥さまがお呼びです」

と言うと、婆さんはわざと、

「どちらさんで？」

とたずねる。

「向かいの蔣家です」

晴雲がそう言うとき、婆さんは、真珠類を陳大郎の手からひったくって、急いで包みこんでしまい、

「あたしは、あんたとつまらんことをやりあつて暇なんかないんだよ」

「もうちょっとはずむから、売ちなよ」

と陳大郎が言うとき、婆さんは、

「売らないよ、売らないよ。あんたの言うような値段じゃねえ。あたしもずいぶん暇を売っちゃったよ」

そう言いながら箱の中へしまい、もとのように鍵をかけると、抱えて歩き出した。晴雲が、

「わたしが持つてあげましょう」

と言うと、

「いいえ結構」

と言って、ふりむきもせずに、まっすぐ向かいの蔣家へはいつて行った。陳大郎は心中ひそかによろこび、自分も、銀子をしまいこんで、番頭に別れを告げてそのまま宿へ帰った。まさに、

見るは勝利の旗じるし

聞くは即ちよき知らせ

晴雲は薛婆さんをつれて二階へ上がり、三巧児に引きあわせた。婆さんは女を見て心の中で思うには、